

「八十歳のエベレスト登頂」の余波

七十歳でエベレストに登り、七十五歳で二回目のエベレストに登った三浦雄一郎さんが、八十歳にして三回目のエベレスト登頂に成功された。シェルパに登らせて貰ったとか、金力で登ったとか言う中傷・やっかみがあつたりするが、ご自身の二本の足で登ったことには違いはない。ぼくには逆立ちしてもマネすることはできない偉業である。三浦さんのアンチエイジングの冒険に心から敬意を表したい。

6月2日～11日、「地球を遠足」で、モロッコのツブカル山に登ってきた。モロッコに出かける前日、週刊誌の記者さんから三浦さんのエベレスト登頂について電話取材があつた。中傷・やっかみについて意見を求められたから、前述のように「アンチエイジングの冒険」ということで、だれにもマネのできない偉業であると、ぼくの考えを披露した。

是非論に参画する気はないが、マネする人が出るんじゃないかという記者さんの心配は、的外れでないと感じた。マネすることが好きで得意な日本人気質を考えると、エベレスト登山をめざすアマチュア登山者が増加するであろうことは想像に難くない。エベレストの公募登山は、究極の登山ツアーである。エベレスト登山ツアーへの申し込みが増加し、そんな登山者でルートが渋滞することを想像すると、不謹慎ながら可笑しい。

昭和40年代前後、我が国のクライマーに大きな影響を与えたフランスのアルピニストであり、ガイドのガストン・レビュファは修業時代、先輩のガイドから「まず頭で考えろ、お前はなにがしたいのか、そしてなにができるのか。アルピニズムとは、なによりも自覚の問題である」と、教えられたと氏の著書に紹介されていた。この言葉を聞いたとき、孔子の言葉が頭に浮かんだ。「知る」ということはどういうことなのか、弟子に質問されて、子曰く「知るを知るとし、知らざるを知らずとす、これ知るなり」。これぞ自立である。

自分がやりたいこととして、エベレスト登山に憧れ続けていた人が、自分の体力・技術・経験・時間・経済を考えて、できると判断したうえでの公募登山申し込みだったら、彼のチャレンジは、安心して見守っていただけると思う。しかし、ブーム便乗型は心配で見られない。今後のエベレスト公募登山での事故増加の懸念が、ここにあるということである。それ以上に心配なのは、エベレスト公募登山より一般登山者のネームバリューに惑わされての背伸び登山の方だ。登山情報誌『岳人』2013年7月号にあった記事、「槍ヶ岳北鎌尾根狂騒曲」を読んで、我が国の登山界もここまで墮ちたかと、愕然とした想いにかられた。「山と高原地図」片手に北鎌沢出合いでウロウロしている登山者が目立つという。そんな輩が増加することは間違いない。

自立した登山者の育成が急務ということであろう。